

## もう一つの輸出大国ドイツ

新井 俊三 *Shunzo Arai*

(財)国際貿易投資研究所 研究主幹

アメリカ発の金融危機が世界に波及していく中で、日本への影響の大きさが注目を浴びた。金融機関は比較的健全、住宅バブルもなかったが、円安による対米輸出で景気回復を図ってきたために、米国経済の落ち込み、需要減により大きな打撃を受けた。米国市場に依存しすぎ、なおかつ自動車や薄型テレビなど特定品目の輸出に集中しすぎたと指摘されている。08年10-12月期の実質GDP成長率(年率・前期比)は外需寄与度がマイナス11.8となつて、マイナス12.1%となった。

日本と同様外需に頼り景気回復を図ってきたのがドイツである。同じ時期、ドイツの成長率もマイナス8.2%となった。外需寄与度は8.4で、内需寄与度はプラスであった。

輸出依存度の高いドイツでは今回の世界不況でどのような影響を受け、どのような議論がなされているのであろうか。

ドイツの輸出依存度は2008年の名目ベースで47.0%で、日本の17.4%や米国の13.0%と比較し、はるかに高い。ドイツのGDP成長率は外需に支えられ2006年には3.0%、2007年には2.5%とドイツとしては比較的高い成長率を達成した。

ドイツの主要輸出先はEU諸国であり、2004年から08年まででシェアで62~63%を占める。EU域内では新規加盟国のシェアが徐々に高まっている。伸びが著しいのはBRICs向けであり、4

---

年間で87.6%増加、シェアでも5.9%から8.2%と拡大した。

ドイツの主要輸出品目は、一般機械、輸送用機器、電気機器、プラスチック、医薬品、光学機器などで、資本財が多い。EU 新規加盟国、BRICsなどが工業化を進展させれば、それに必要なドイツからの資本財の輸出が増えるというパターンとなっている。

ドイツの輸出産業は経済危機により、それまでの世界的な好況による売上増、雇用増から一転受注減、操業短縮、雇用の削減に追い込まれている、といえる。

ドイツの輸出依存の高さ、しかもそれらを担うのが一般機械や電気機器など伝統的な製造業、いわゆるオールドエコノミーであることへの批判は好況時にもあった。IT産業など先端技術産業に力を入れるとともに、製造業中心からサービス産業に重点を移し、内需型産業の振興を図らねばならないという意見である。

ここにきて輸出の急激な落ち込みから、今年の経済成長率がマイナス6%という予想となり、またこの議論が再燃している。

しかし、輸出依存度の高さという点については変更すべきでないという意見が多い。Ifo 経済研究所のカルステンセン教授は、「ドイツは資本財の輸出に特化してきており、需要は特に景気の変動を受けやすい。好況のときは平均以上に利益が出るが、不況のときは打撃が特に大きい」とし、ビジネス・モデルを変更すべき理由はない、としている。ケルンにある財界系のドイツ経済研究所のヒューター教授も「ドイツ・モデルは国際分業の結果であり、簡単に変更できない」と指摘している。メルケル首相も6月に行われたドイツ産業連盟（BDI）設立60周年記念行事の挨拶で、輸出に依存するドイツ経済が現在の危機でとりわけ打撃を受けているが、輸出立国に代わるものはない、と述べた。

---